

きびしい冬を迎えた私立幼稚園教育



高橋系吾

現在全国的に園児減少の状況が見られて
いる。10%、30%と言うことで父母負担
のみ頼らざるを得ない私立幼稚園の経営は
危機に立たされている。

園児減少の原因はいろいろ考えられる
が、主なるものは次のようである。

(一) 幼児人口の減少

厚生省調べによる過去七年間の出生数は
次のように報告されている。

昭 48	209 万 1,983 人
49	202 万 9,989 人
50	190 万 1,440 人
51	183 万 2,617 人
32	175 万 5,100 人
53	170 万 8,643 人
54	164 万 9,000 人

(推計)

昭和五十四年は昭和四十八年に比べて約
四十五万人の幼児数が減少していることに

なって、この減少の傾向は益々下降するこ
とが予測されている。

(二) 公私立の乱立

幼児教育の現状を見ると日本の就学前教
育は図の如く複雑多岐にわたっている。

統一した行政機関によつていない為に、
適正配置が行われず、ばらばらの状態にな
っている。

この為に必要な地域には出きず、不必要
の地域に乱立する傾向がでている。私立幼
稚園間の設置は、私立学校審議会で調整さ
れるが、公立幼稚園は教育委員会、私立幼
稚園は知事部局と分れ、ある日突然私立幼
稚園の隣に公立幼稚園が設置され、例えば
新宿区の如く私立幼稚園三四園が半分廃園
となり、このような事態が他の区市町にも
起きつつある。

尚三歳～五歳児は幼稚園、保育所でも競

就学前教育の現状

小学校教育 5歳児 90%										
在家庭幼児 (未就園)	保 育 所				幼 稚 園					
	未 認 可 施 設	私 立			公 立	未 認 可 施 設	私 立			公 立
		個 人 立	宗 法・財・社 団立	社 会福 祉法 人立	区、 市、 町、 村		個 人 立	宗 教法 人立	学 校法 人立	市、 区、 村、 町

合が起きて問題になっている。

(三) 幼稚園より保育所へ

所謂「幼稚園ばなれ」という傾向である。働く母親が多くなった事から、短時間の保育より長時間の保育を望む傾向になった。

尚都會あつては家庭には庭(遊び場)がなく家(か)だけになり、外は交通の危険にさらされているので、少しでも長く園で預つて欲しいと求める傾向になった。

幼児期の教育は園での集団の教育と共に、家庭の父母による生活が人間形成の土台になることを理解しながらも生活事情が先になっているようである。

最近増加しつつあるベビーホーム等といわれる未認可の幼児施設では二十四時間の終日委託も多いと聞くと、これでは「親放れ、子放れ」となりその子の成長に不安を

持つものである。

(四) 園の施設、設備の不備

幼稚園教育の三要件は

- 施設、設備
- 教育内容
- 教師の充実

であり、このうちでも施設、設備の充実が強く要望されている。特に新設の公立幼稚園、公立保育所は行届いているものがある。

園の教育の歴史の長い事はよい伝統となっているが、併せて施設、設備の現代化も急務である。

(五) 私立幼稚園経営のあり方

園児減少を防ぐ、唯一最大の道は「経営のあり方」であると考える。

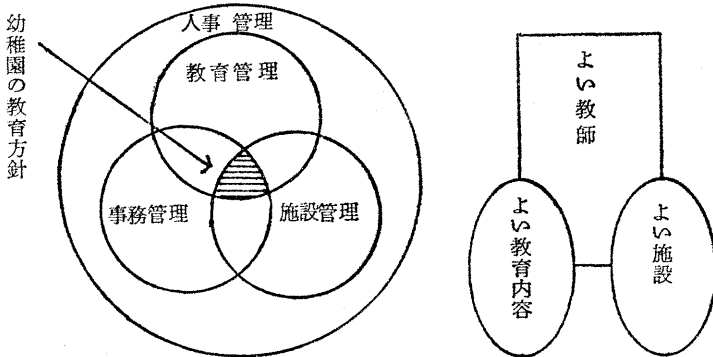
全国のいろいろな地区の実情を調べて見ると過疎地といわれ園児数が激減した園の隣接園が平年通り集り、過疎地域でありながら集まらない園もあることを思う時に父母が園の教育内容を調べて、評価し、選ぶ時代になったのではないかと考える。

園の経営は次の図のように、施設管理、施設管理、事務管理となりこれを人事管理がつつみこの重なりを貫くものが教育方針であると考えている。平凡の事ながら「よい施設、よい教育内容、よい教師」によって、良い教育が実現するものである。

園児減少の為に私立幼稚園はマスコミからいろいろの批判を受けている。

- バスの送迎合戦
- 入園の勧誘
- 幼稚園教育の特色競争（はだかの教育・茶道・唐手・剣道・文字・漢字・計算力・英語・体操の技術指導、等）
- 保育料の値下げ

幼稚園経営のありかた



等の批判に就いては謙虚に受けとめ、稍もすると日本の幼稚園教育は小学校志向型に走り易いことを反省し、西欧の如く家庭延長型と考え、「真の幼稚園教育とは何か」を衆知を集めて研究する時と考えている。

ある新聞の投書欄に次のような記事が記載されていた。

「おしえて欲しい本当の幼児教育」二十九歳の主婦であった。

わが家の長男は毎日一時間歩いて、一年保育の園に通っている。基本的な生活習慣を身につけることに重点をおき、できるだけ自然の中で、健康、安全で幸福な生活のため心身の発達を助長するのが園の方針である。

これは最高の教育と思っているがその反面、あちこちで英才教育がいわゆる昨今何か物足りなさを感じてしまう私である。……幼児期に最もふさわしい教育とは、いったいどのようなものなのでしょうか。」

全国にこのような父母が沢山いると考える時、幼稚園教育の特色をもう一度考え直す必要がある。

○ 幼児の発達に応じる（ひとりひとりをみつめる。）

○ 適当の環境を与える。（人と物の両面）

○ 生活経験に即する。（生活の中から見出す）

○ 総合的の指導を行なう（断片的ばらばらでない指導）

この四つの条件に合った指導こそ「ほんとうの幼児教育」と言えるのではないだろうか。眼に見える小学校志向の知識の教育を行なって頭がよい、物識り、利口そうよりも、眼に見えにくいものを育てる教育、引き出す教育によって、根気がよい、我慢する、やりとげる意志意欲の柱、思いやりがあり、無邪気、子どもらしく元気がああるの情操の柱こそ今の幼児期に育て「少し位暑くとも、寒くとも、空腹でも、疲れて

も我慢する心」が、今後の成長に必要である。

このような人間形成の土台が出きれば青年の非行化は防ぐことができると思つており、このような平凡であつても本當の幼稚園教育に努力すべきことを反省している。

（道灌山幼稚園）

